教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会
発行者　鈴　木　則　利
編　集　広　報　部

もくじ

◎巻頭言 …… 1
◎全国専門部活動報告 …… 2
◎関ブロ千葉大会報告 …… 3
◎第59回研究大会記念講演 …… 4
◎コロナ禍の中で（２年目を迎え） … 5～9
◎特色ある学校 …… 10
◎地区だより …… 11
◎ひろば・編集後記 …… 12

巻頭言

離職率を減らす新卒採用と人材育成

一般社団法人栃木県薬剤師会会長
株式会社 パワーファーマシー 代表取締役　渡　邊　和　裕

教頭会報の巻頭に投稿するにあたり、私が経験してきた人材の採用と育成方法についての経験談を、教頭先生の皆様にお役立ていただける内容になれば幸いです。

私が代表を務めている株式会社パワーファーマシーは、栃木県を中心に茨城･福島･宮城に34店舗の保険調剤薬局を展開しています。平成10年に創業し現在23年が経過しました。薬剤師80名､医療事務120名とそれなりの組織に成長してきたと思いますが、ここに至るまでには人員不足に悩まされる日々の連続でした。ようやくここ３年ほど人員確保が安定していますが、その大きな要因は、新卒採用による補充が安定してきたことにあります。

創業当初は、名も無い企業に薬剤師が応募してくれることは皆無でありました。今も昔も医療業界においては、医師・看護師不足もそうですが、薬剤師不足も相当厳しいものでした。いわゆる医薬分業が進み、保険調剤薬局の開設が増え、需要過多になり、人材募集は大変だった記憶があります。私も休みを返上し、なんとかお店を回す実情でした。そうした苦労の中で採用できた社員には感謝しかなく、『社員を大切にする』企業目標を掲げました。

アットホームな社風づくりが次第に、夫婦や姉妹で入社、社内結婚も７組ほどあるなど、益々家族的雰囲気となり、それが採用へとつながり、やがて離職率も減ってきました。そんな中で、薬科大学６年制が始まり、５年生は薬局で６週間実習することがカリキュラムに組み込まれました。当社でも定期的に実習生を受け入れていますが、新卒採用の拡充は、当社のアットホームな社風が学生にも受け入れられ、実務実習生がそのまま当社を希望してくれたことに他なりません。実習期間中の6週間で内情も知り得て入社しているので、離職することなく、今や会社の中堅社員になっている人も多く、社内組織の強固の礎になっています。

また、私が30代、40代の頃は社員と世代も近く、兄貴分のように接していましたが、今や新卒者は自分の子供と同年代になってきており、世代間の隔たりを感じています。そんな中、中堅社員に成長した社員たちがリクルータとして活躍し、かつて私が兄貴分だった頃のような役割を担ってくれており、スムーズな役割交代も行えています。

薬局では、薬剤師と医療事務員の職種が違う者が１つの店舗内で一緒に勤務しています。そうなるとほとんど仕事が縦割りになりがちですが、そこはお互いフラットで尊重し合いながら、そして助け合いが必要であると口酸っぱく擦りこんでいます。

そして必ず社員に伝えていることは、常に同僚、友人、家族に感謝をしなさいということです。「感謝をした数だけ　感謝される人間になれる」最後は『人間力』だと思います。それが全て、患者さんや地域から信頼される薬局に成長できることと考えています。

コロナ禍の中、ここ約１年半は感染対策を最優先に、従業員の集まりも全く行えておりません。やはり人間同士 face to face のコミュニケーションが大切です。WITHコロナ時代になり、新たなステージに立てた時、より一層社員同士のファミリーとしての信頼を深めていきたいと心に決めております。

全国専門部活動報告

全国公立学校教頭会総務・調査部活動報告

全国公立学校教頭会総務・調査部員　宇都宮市立海道小学校　小　栗　克　樹

全国公立学校教頭会総務・調査部は、「職能研修団体として副校長・教頭の社会的地位の向上、学校現場における教育活動の充実と教員の働き方改革に向けた要請活動の充実を図る。」「全国小中学校の副校長・教頭による調査に基づき、教育現場の現状や実態を的確に把握する調査を実施、資料を作成し、政策提言能力を高め、要請活動に活かす。」という基本方針の下、国会議員や文部科学省等への要請活動、「全国公立学校教頭会の調査」の実施及び分析、全国公立学校教頭会研究大会における分科会の企画・運営等を行っています。

今年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染防止のため、活動は全てZoomを用いたオンラインで行っています。７月には昨年度実施できなかった全国要請推進部長会をオンラインで実施しました。Zoomのブレイクアウト機能を使い、グループ協議も行いました。事後のアンケートでは、回答者の98%以上が「よかった・とてもよかった」と回答し、オンラインでも全国の仲間と意見交換ができたことや、移動の時間を節約し、効率的に会議に参加できたことなどに満足した様子がうかがえました。新しい生活様式における活動の在り方の一例を示したという面からも意義深かったと思います。

８月には、全国公立学校教頭会研究大会（オンライン）に参加し、開催県である佐賀県の先生方と協力して、第６分科会（副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題）の企画・運営を行いました。令和２年度の「全国公立学校教頭会の調査」結果報告と令和３年度の要請文の解説を行い、協議の柱を示して、グループ協議を行いました。どのグループも活発な意見交換がなされていました。

現在は、７月に実施した、令和３年度の「全国公立学校教頭会の調査」の分析・考察作業を行っています。分析・考察の結果は冊子にまとめ、令和４年２月に全国の会員に配布する予定です。

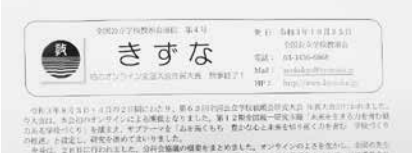
全国公立学校教頭会広報部活動報告

全国公立学校教頭会広報部員　宇都宮市立御幸が原小学校　村　松　保　子

全国公立学校教頭会広報部は、３つの基本方針「①全国公立学校教頭会の活動状況を全会員及び関係諸機関に機関誌とホームページを活用して広報することにより、会員の資質向上と本会の地位向上に寄与する。②機関誌において、全国の副校長・教頭が抱えている課題などを取り上げて編集し、教育管理職としての専門性の向上に資する。③全公教の活動を取材し、機関誌や教頭会通信及びホームページにおいて研究大会や各ブロックの活動、専門部の取組を紹介し、学校現場での活用と情報の共有を図る。」のもと、活動を行っています。今年度は、東京・千葉・埼玉・茨城・栃木の副校長・教頭７名と全公教事務局担当者１名の計８名で活動します。

活動の一つ目は、機関誌「Educasphere（エディカスフィア）」に関するものです。年３回６月･11月･２月の発行に向けて、編集会議を開きます。実際には、６月の全公教定期総会後からスタートし、オンラインZoomによる専門部会で役割分担を行い、担当する記事の作成・校正・編集を行いました。

二つ目は、定期総会や研究大会・要請推進部長会・研究部長会などの取材活動を行い、教頭会通信「きずな」として発行することに関わる活動です。今年は、全公教研究大会が佐賀県で行われましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、その大会の取材活動も全てオンラインZoomを使ってのものとなりました。講演内容はもとより、発表された方々の表情を画面の中ではっきりと確認し、職場に居ながらにして佐賀大会の熱い思いを感じることができました。各種会議や大会の内容等については、全公教ＨＰ等の教頭会通信「きずな」をご覧ください。



関ブロ千葉大会報告（オンライン大会）

第62回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会千葉大会に参加して

益子町立田野小学校　若　色　敏　行

全国統一研究主題を基に、サブテーマ「夢と思いやりの心を持ち、新しい時代をたくましく生きる子供の育成」の具現化を目指した取組について提言及び研究協議を行いました。

今年度は、初のオンラインによる開催となり、研究課題ごとの12の分科会で、提言発表・グループ協議・協議内容の報告等をしました。私は、芳賀地区教頭会での取組についての提言発表を行いました。

芳賀地区教頭会では、研究委員を中心に、研究課題「施設・設備及び事務に関する課題」について、研究主題「安全・安心な学校づくりのための教育環境整備」、サブテーマ「学校の危機管理における教頭の果たす役割」として、３年の研究計画の２年目の発表でした。今回、芳賀地区の全小中学校の実践例を項目ごとに整理し、教頭としての役割と教職員や関係機関との連携を明確にした「関与表」を中心に発表しました。関ブロ大会に向けて、6月の「提言者研修会」にて、助言者の先生方からのご助言等をいただきました。その後、芳賀地区の役員及び研究委員研修会にて、原稿やプレゼン用スライドの仕上げ及び発表のリハーサルを行い発表当日を迎えることができました。発表後、参加者の方々からも「ぜひ参考にしたい。」との声をいただきました。

また、千葉県の提言発表では、「チームとしての学校」の視点から、実現するための学校の体制について、学校事務と連携した学校の組織づくりの在り方について学ぶことができました。

今回の提言発表に際し、御指導・御支援をいただいた関係者の皆様に厚く御礼を申し上げ、発表報告とさせていただきます。

関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会千葉大会に参加して

足利市立三重小学校　駒　場　史　明

令和３年11月12日に「第62回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会千葉大会」（研究主題　未来を生きる力を育む魅力ある学校づくり～夢と思いやりの心を持ち新しい時代をたくましく生きる子供の育成を目指して～）がオンラインにより開催されました。８つの関ブロ研究課題のなかの「施設・設備及び事務に関する課題」分科会に参加し、２地区の提言について６名（千葉４名、東京１名、栃木１名）のグループでZOOMを使用して意見交換を行いました。

はじめに、本県芳賀郡市小中学校教頭会から３か年研究を進めてきた「安全・安心な学校づくりのための教育環境整備～学校危機管理における教頭の果たす役割～」についての提言がありました。教頭としての関わり方を可視化する関与表の作成について、その有用性や安全教育主任、養護教諭との連携の大切さ、教職員の場に応じ適切な判断材料としての関与表の活用等、貴重な話をいただきました。意見交換では、関与表の作成について、学校の実情に応じて考えていきたいという声が多く、できることから取り組んでいくことが確認されました。次に、千葉市公立学校教頭会から「チームとしての学校を実現するための学校の体制整備について～事務職員と連携した学校の組織づくりと教頭の役割～」についての提言をうけ、学校事務・業務の効率化のための学校間連携や事務職員と教頭との効率的な連携について意見交換を行い、事務職員がチーム学校の一員として積極的に教育支援に参画していける組織体制の見直しや事務職員の情報発信の場の設定が話題となりました。今大会の提言をもとに、学校教育活動や学校運営に関する教頭の役割を再認識し、今後の学校運営への決意を新たにしたところです。

第59回研究大会記念講演

県研究大会　記念講演会の運営について

県教頭会研究部長　宇都宮市立姿川第一小学校　大　木　和　明

令和３年11月19日に「第59回研究大会記念講演会」を開催することができました。昨年は、コロナ禍の影響で研究大会が紙面発表となり、講演会も実施することができませんでした。今年こそは……という思いで準備を進めておりましたが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、本年度も参集型の研究大会は行わず、分科会は紙面発表とし、記念講演会には本部役員及び地区研究部員のみに参加していただく形での開催としました。

講師の先生は、昨年もお呼びする予定であった「株式会社ヤマオコーポレーション代表取締役　鬼澤慎人先生」で、『やる気を高め、組織力を高めるリーダーシップとは』についてご講話いただきました。講演会については、５月に実施した定期総会同様、動画利用研修という形をとらせていただき、県教頭会ホームページから会員の皆様に視聴していただくようにしました。

県教頭会活動内容の一つに、『「関与性」「継続性」「協働性」を重視した実践的な研究活動の充実』があります。新型コロナウイルス感染症の影響により、参集型の研修会や大会の開催が難しい２年間でしたが、今後新しい生活様式に基づく新たな取組として、参集型やオンラインを組み合わせた研修会や大会が検討されると思います。どのような状況下にあっても、その時その時の現状を正しく判断し、新しい時代を生き抜く創造的でたくましい児童生徒の育成を目指し、研究部として今日的な教育課題を踏まえた研究活動の充実に努めていきたいと考えます。

栃木県公立小中学校教頭会研究大会記念講演会に参加して

宇都宮市立田原小学校　山　口　和　彦

先日、県教頭会研究大会記念講演会に参加して、株式会社ヤマオコーポレーション代表取締役の鬼澤慎人氏の講話を拝聴しました。演題は「やる気を高め、組織力を高めるリーダーシップとは」です。これは、私たち管理職にとって大変魅力的な演題です。

最初に鬼澤氏は「正解は一つではありません。」と話され、ご自身の経歴を踏まえながら、テーマの核心に迫るための様々なピースをテンポよく私たちに投げかけられました。

「ファシリテーターの重要性」、「全員参画の秘訣」、「場づくりの大切さ」、「アスリートのメンタルトレーニングとの関係性」、「物事を俯瞰的に捉えることの意義」、「感謝のことばにまつわる話」…等々。

その一つ一つに頷きながら聞き入っていると、いつの間にか終末となっており、話術の巧みさに驚きました。そして、改めて正解は複数ありますがと話されたあと、「リーダーシップについて一つ言えるのは、人の成長・成功を支援するということです。」と示されました。相手の立場になってやりとりをしていくことや他人の可能性を信じられるかどうかが重要であると。例えば、相手の耳ではなく、心に届くように伝えることがリーダーシップに結び付く、一つのアプローチであるそうです。ここで、伺ってきたお話の個々のピースがつながり、すとんと心に入りました。

今回、貴重なお話を聞かせてくださった鬼澤慎人氏と、その話を直に聞くことのできる場を設けてくださった、県公立小中学校教頭会事務局に改めて感謝申し上げます。

コロナ禍の中で～２年目を迎え～

感染症対策を踏まえた学校教育活動の取組を振り返って

宇都宮・上三川小地区会長　上三川町立明治小学校　鷺　嶋　優　一

新型コロナウイルス感染症について予断を許さない中、令和３年４月を迎えました。以下、栃木県の感染状況と併せて、今年度の本校における10月までの取組を振り返ってみたいと思います。

４　月：新規感染者数が増加傾向にある中、始業式実施。児童はすっかり毎朝の検温・手洗い励行・消毒・マスク着用・３密を避けるなどの基本的な感染対策の習慣が身に付いていた。入学式は、来賓を招待せず、人数制限をした中で挙行。

５・６月：若年層の感染者増加傾向。修学旅行・遠足等の行事の実施について検討。逐一変化する感染状況を踏まえながら実施の可否に神経を使う。

７　月：変異株急増により、感染対策の見直し。夏の傘さし登校開始。

８　月：県版まん延防止等重点措置８／８～。緊急事態宣言８／20～９／30。夏休み明けの児童の不安やストレスへの対応と人権への配慮についての指導を重点的に行う。

９　月：ＩＣＴを活用した学習保障への取組。オンラインミーティングを主催するための職員研修や環境整備。児童がミーティングに参加するための学習訓練、タブレット持ち帰り、オンライン試行。外部の行事は中止または書面開催。

10　月：10／14県版まん延防止等重点措置解除。参観人数の制限をしたうえで午前のみの運動会を実施。コロナ禍であいさつが減ってしまったことを踏まえ、児童会を中心とした「あいさつ運動」の再開。

どの学校においても、地域の感染状況や児童の実態を踏まえながら、いかに教育活動を継続していくかを、全教職員で知恵を絞りながら進めてきたことと思います。これからも、子供たちの健やかな学びを保障していけるよう、感染状況を見据えながら、教頭職としての関与性を発揮していくことが大切であると考えます。

新型コロナウイルス感染症対策

宇河中地区副会長　上三川町立上三川中学校　山　嵜　昌　彦

本校で行っている行政や地域と連携した取組を紹介いたします。

【上三川町教育委員会との連携】

上三川町では、教育長が町長との連携を絶えず行ってくださっているため、臨時校長会の速やかな開催などを含めて、情報の共有ができている。

・小中連携

教育委員会が中心となって中学校区ごとの小学校と中学校が互いに協力する体制を整えてくださっているため、中学校区ごとの小中連携をスムーズに行うことができる。

緊急事態宣言中は、兄弟姉妹の体調不良による早退や欠席の連絡を密に行い、感染症の予防を行うことができた。

・ワクチンの優先接種

教職員の希望者は夏休み中に接種が完了するように優先的に配慮していただき、副反応等での業務への影響を最小限に抑えることができた。その結果、児童生徒への対応等に時間を有効に使うことができた。

【地域の方の協力】

・学校運営協議会

昨年度、学校運営協議会で新型コロナウイルス感染症対策について提案したところ、賛同いただき、ボランティアとして、放課後の消毒作業に取り組んでいただいた。

教職員が教育相談や部活動等、生徒への対応に時間を使うことができ、とても助かった。ありがたかった。

・民生委員・児童委員

学校運営協議会委員の方々が取り組んでくださった活動を、民生委員・児童委員の方々が引継ぎ、計画を立て、毎日のように消毒作業に取り組んでいただいた。

プラスへの転換　小来川小 ⟷ 中宮祠小　オンライン合同授業

上都賀地区副会長　鹿沼市立北押原中学校　小　林　正　久

日光市立小来川（おころがわ）小中学校は児童・生徒20名の小中併設校です。小規模校には少人数という大きなメリットがある反面、同学年との多様な意見に触れる機会が少ないというデメリットもあります。そこで、小来川小中学校では以前から市内の中宮祠小中学校と交流を進めています。中宮祠小中学校も児童・生徒13名の小中併設校であり、両校の交流はお互いのデメリットを補えるものの一つとなっています。これまでは宿泊学習の合同実施などが主でしたが、タブレットの配備が進んだことにより、令和２年９月からは、コミュニケーションアプリを使い、両校の児童がタブレットを通して合同で授業を行っています。児童にとって、何よりも同世代の多様な意見に触れる絶好の機会となっています。最近では、課題解決に真剣に取り組み、進んで発言しようという熱意の高まりを感じられるようになってきました。また、授業は、両校の教員が自分の専門性を生かして、Ｔ１・Ｔ２を分担して進めています。

課題としては、回線が切れてしまうことがあり、今後の通信環境の改善に期待したいところです。また、両校の異なる日課を当日揃えたり、事前の打合せをやりとりしたりと様々な調整も必要になります。

しかしながら、コロナウイルスの感染拡大に伴い、対面授業の代替としての側面が取り上げられやすい「オンライン授業」をプラスに捉えて活用する両校の取組は、教育の可能性を広げるものとして大いに参考になるのではないでしょうか。

学びを止めない

芳賀地区会長　真岡市立長沼中学校　小　出　幾　子

本校は西に鬼怒川が流れ、東には筑波山を望む豊かな自然に囲まれた、全校生徒60名程の小規模校です。小学生の時から同じ学級で過ごしているので、お互いのことをよく知り生徒達はとても親密です。反面、社会性を育むことが課題でもあります。

コロナ禍で学校行事の縮小や中止が相次ぐ中、「小規模校だからこそできる」を強みとして日々の教育活動に取り組んでいます。その一つが「オリンピック・パラリンピック教育」です。学校連携観戦チケットに当選し国立競技場での観戦が決まっていました。令和元年度から総合的な学習の時間の学年テーマである「環境・将来・国際理解」と、個人の課題をリンクさせた調べ学習や、ボランティア精神、障害者教育、各教科での取組を始めました。オリパラ財団による「あすチャレ！スクール」にも参加し、車椅子バスケ選手の講話と競技体験、生徒会主催のオリンピック集会などを実施してきました。残念ながら観戦は中止となってしまいましたが、生徒達は以前より積極性が身に付き、社会への視野が少しずつ広がってきたことを感じました。何度も延期を重ねたメダリストの講演会も最後のまとめとして２月には実現できそうです。そして「学びの保障」です。昨年度本校は市のＩＣＴ教育重点校の指定を受け、一人一台端末を活用した授業実践を行いました。

感染症対策により学習形態に配慮が必要な言語活動において特に効果がありました。主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、授業力向上を目指しさらに研鑽を積んでいます。

安全・安心を第一に掲げつつも、「学びを止めるな！」を合言葉として、今後も教育活動の実現と充実に努めていきます。

安心した日常を目指して

下都賀地区会長　栃木市立赤津小学校　松　本　頼　夫

本校では、学校連絡メールの健康チェックアプリを活用し、スマートフォンで体温、風邪症状の有無、倦怠感、家族の体調異常の報告をしていただくようにした。それにより、登校前に児童の健康状態の把握ができるようになり、登校時の密を避けることができた。

学習面では、GIGAスクール構想の整備に伴い、児童１人に１台のタブレットが支給されたことで３つの成果が見られた。１つめは、今まで以上に視覚的情報の活用が促進され意見の共有化が図れ学び合いが向上したこと。２つめは、eライブラリーなどの様々なコンテンツを活用することで、個に応じた進度で学習訓練ができるようになったこと。３つめは、Teams の活用で家庭に居ながらにして担任とのやりとりができるようになってきたことである。運用については、事前に学年ごとにオンラインでの接続確認の時間を設け、確実に全児童が接続できるようにした。それにより、欠席した児童がオンラインで授業に参加することも可能になった。

また、授業参観がなくなり、児童の様子を伝える機会が減ってしまった。その対策として、学校のＨＰに保護者のみ閲覧可能な専用のページを作成し、何気ない子供たちの日常生活の写真を掲載することで、少しでも生き生きとした児童の様子を見ていただけるようにした。

さらには、対面でのグループ活動や地域交流活動等の制限で、児童は無意識のうちにストレスを感じ、些細なことで喧嘩をしたり不安を覚えたりするようになっている。そのために、定期的な教育相談を実施し、特に心のケアが必要な児童には、本人や保護者、スクールカウンセラー、教育委員会等との面談を随時実施し、少しでも不安を解消できるようにしてきた。今後も感染症との共存になることが予想されるが、学習の歩みを遅らせることなく、「主体的・対話的で深い学び」を進め安心して学校生活が送れるようにしていきたい。

新型コロナウイルス感染症対策

塩谷地区会長　さくら市立氏家中学校　五月女　康　弘

間もなく新型コロナウイルス感染症との戦いが丸２年をむかえようとしています。塩谷地区においては、各市町教育委員会との連携の元、各市町において感染症対策を実施しているところです。今回は、さくら市立氏家中学校の感染症対策を実施しながらの学校教育活動について報告させていただきます。

本校は、生徒数1,047名、全学級34クラスの大規模校です。学校生活においては、密を避けるのは物理的に難しいので、換気や消毒を徹底する感染症対策を実施しながら、教育活動を行っています。密を避けることに主眼がおかれた昨年度は、学校の主要な行事であった運動会や校内駅伝大会を中止せざるを得なくなり、生徒たちには寂しい思いをさせてしまいました。今年度は、何とか実施したいとの思いのもと、どうすれば密を減らして実施できるのかを担当者が考えた末、運動会も校内駅伝大会も学年ごとに開催することにし、実施することができました。例年とは違った方式での開催でしたが、生徒たちは非常に満足した様子でした。また、学年ごとに実施したことにより、氏家中学校が長年抱えていた、保護者の駐車場の問題も解決し、思わぬ副産物を得ることができました。

また、授業においては、話合い活動ができないことから、タブレットを使ったやりとり等で、自分の考えを伝える活動を取り入れたり、出席ができない生徒へのオンラインでの授業を提供したりするなど、情報機器の効果的な利用を推進することができました。

様々な活動が制限された中でしたが、今まで常識と思っていたことを考え直す良い機会となったと共に、働き方改革にも大きな影響を残すことができたと思います。改めて、教師集団の優秀さを実感できた１年でした。

遠隔教育の推進

那須地区副会長　大田原市立蛭田小学校　室　井　壯　夫

大田原市では、各中学校区で小中一貫教育を推進しており、湯津上中、佐良土小、湯津上小、蛭田小の４校からなる湯津上中学校区は、「雄飛が丘学園」の愛称で「夢をもち実現できる児童生徒の育成」を目標に、９年間を見通した教育を推進しています。今年度は、ＧＩＧＡスクール構想により、本市においても児童生徒１人１台のパソコンが年度当初から使用できるように準備が進められました。さらに雄飛が丘学園は、市のＩＣＴ活用推進研究事業の「遠隔教育」の推進モデル地区に選定され、学園内で、リモートを活用した授業実践や交流活動についての研究を進めました。

リモートによる小中合同主任会や３校合同学年会を定期的に実施し、学習指導、児童生徒指導、保健指導に関する情報交換やリモート合同授業の計画を話し合いました。前期までに実施されたリモートによる教職員の交流、児童生徒間の合同授業、学年交流はのべ140回に達するほど活発に行われました。

各種大手企業のリモート工場見学や、地元企業へのリモートインタビューの実施、教員が特派員として現場に行き、教室と現場をつないだ中継授業の実施、郷土資料館や国立ハンセン病資料館、海外在住の日本人親子、ダンスインストラクターなど、国内外の様々な外部機関の皆様の協力を得ての遠隔授業も各学年で進めていきました。

遠隔教育の推進により、地区内の小中学校がつながり、教員は雄飛が丘学園の一員として、指導観を共有し、連携して児童生徒の指導にあたることができました。児童生徒も、リモートを活用することで、コロナ禍以前よりも一層交流する機会が増え、多種多様な考え方に触れたり、相手を意識した表現を工夫したりすることができ、学びを深めることができました。

コロナ禍のピンチを、ＩＣＴ活用のチャンスと捉え直し、児童生徒、教員のスキルアップにつなげることができました。今後も「チーム雄飛が丘学園」で、学習効果を高めるツールとしてのＩＣＴ活用について研究していきます。

新たなスタンダード

南那須地区会長　那珂川町立馬頭小学校　髙　堀　陽　子

新型コロナウイルス感染症との付き合いも２年目を迎えました。マスクの着用、朝の検温・アルコール消毒、給食は前を向いて黙食…かつては考えられないような生活が続いていますが、それが当たり前になり、そして新たなスタンダードとなりつつあります。

学校行事においても、「分散型の授業参観」や「午前中のみ参観者限定の運動会」などなど、新しいスタイルを模索してきました。当初は、どうなることかと不安もありましたが、子供も保護者も受け入れる側は柔軟に対応してくれました。運動会については、午前中の実施ということで『お弁当の心配をすることなく朝から心置きなく観戦できてよかった。』という予想外の感想もいただきました。物足りないといえば物足りないけれど、今までの当たり前を見直すよい機会だったのかもしれません。

教職員の中でも新たなスタンダードが生まれています。タブレットＰＣが全校児童に貸与され授業での活用やオンライン授業に向けた取組が急加速で進んでいます。Meet でのオンライン全校集会の実施、宿題をオンラインで配信したり家庭での音読の様子を動画で提出したり…、この半年の間に学びのスタイルも大きく変化しました。変化に戸惑うベテラン勢に対し、それを優しくフォローする若手、なんと頼もしいことでしょう。教育技術は、ベテランから若手への継承が重要ですが、若手からベテランへの“逆ＯＪＴ”これに助けられた半年間でした。新型コロナウイルス感染症もだいぶ下火となってきましたが、この新たなスタンダードが定着するのか、また次の新しいスタイルが現れるのか、現場は柔軟に対応していきたいと思います。

「学びの保障」と「感染防止」のための取組

佐野地区副会長　佐野市立旗川小学校　川　俣　はるみ

各学校が特色ある取組をしていますが、今回は、本校の取組を５点、紹介させていただきます。

1　夏季休業明けの８月30日から２週間の臨時休業中のオンライン学習
　本校では、授業の配信や工作の写真、リコーダー演奏の動画の提出等を行いました。普段と同様の日課で学習を進めることで、児童の「学びの保障」のためには有効であることが分かりました。

2　安心・安全を目指して、教職員へのＰＣＲ検査と宿泊を伴う学校行事参加者への抗原検査の実施
　市教育委員会主導で、教職員対象のＰＣＲ検査を臨時休業終了前と冬季休業終了前に行うとともに、修学旅行と臨海自然教室（海浜自然の家宿泊学習）参加児童や教員への抗原検査をしました。

3　一斉メール配信システム「さくら連絡網」での健康チェックの導入
　本人の体温や咳等の有無と、同居家族の同様の症状の有無（症状がある場合、具体的に記述する）について、保護者がスマートフォンに入力し、学級担任が教師用タブレット端末で毎日確認しています。朝の忙しい時間帯に一目で分かり、データとして健康状態を蓄積できる利便性があります。

4　新型コロナウイルス感染症予防や偏見・差別防止教育
　著作権フリーのパワーポイントの活用や、絵本の読み聞かせをすることで、本校児童の新型コロナウイルス感染症予防や偏見・差別防止への理解を深めることができました。

5　給食時の感染防止対策
　担任と担任外教職員の２人体制をとり、ビニール手袋着用の上、汁物やサラダ等の配膳を行っています。手洗い後の消毒に加え、児童が自分の給食を受け取る直前にも消毒をしています。

今後も「学びの保障」と「感染防止」を両輪に、児童生徒の成長への支援を続けていきます。

学びを止めない・ストレスを溜めない感染症対策
～ 子供の思い・保護者の思いを受け止めながら ～

足利地区副会長　足利市立久野小学校　駒　場　眞　一

1　本校の状況

本校は、全校児童48名の小規模校のため、室内でソーシャルディスタンスがよくとれる環境にある。しかし、決して油断はできない。学校に行って学びたい、遊びたいと思っている子供、感染が心配だと思う保護者の気持ち。どちらの気持ちも受け止め、学びを止めず、ストレスを溜めない感染症対策を常に考えている。

2　感染症対策

⑴　マスク着用・換気・手洗い・消毒の徹底（基本的なことを繰り返し伝え徹底する）
　①マスク　不織布の推奨。自治会の協力で、一人一箱を全児童に配布。
　②換　気　エアロゾル感染対策として窓を開ける＋扇風機（サーキュレーター）で空気を循環させる。
　③手洗い　効果のある手洗いを適時子供たちに伝える。
　④消　毒　放課後、教室内の机、いす、ドアノブ等、教職員が毎日消毒する。

⑵　学びを止めない取組（タブレットの活用）
　①分散登校中、登校児童と自宅待機児童をつなぎ、話合い等を図った。
　②家庭にWi-Fi環境がない児童に対して、市教委からの支援があった。ルーターの貸し出し、公民館の部屋の提供等。必要に応じて保護者と相談しながら活用していく予定。
　③自宅待機をせざるを得ない児童の学びを止めないよう、オンライン授業の方法について教職員の校内研修を実施した。

⑶　子供がストレスを溜めないために
　①気づき・傾聴・つなぎ・見守りをし、子供の不安を取り除く。
　②教員が密にならない遊びを児童に紹介し、共に行っている。竹馬・しっぽ取り（児童同士の接触がない）等。
　③感染状況を見て、延期、縮小等しながらも可能な限り学校行事等を実施し、児童の思い出づくりを大切にしていきたい。

新しい学びに向けて

小山市立東城南小学校　大　石　成　美

本校は開校３年目。児童数680名の大規模校です。コミュニティ・スクールとして、地域とともに歩んでいます。また、英語教育の充実を図るとともにＩＣＴ教育を推進し、魅力ある学校づくりを目指しています。2020年３月、新型コロナウイルス感染拡大の影響による臨時休校をきっかけに、オンライン授業の準備や実践に積極的に取り組み、2021年度からは、児童１人１台タブレット端末で学習できる体制がスタートしました。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、限られた時間で授業を進めなくてはならない状況の中、１人の教員が行う授業を、電子黒板を通して隣のクラスでも受けることができるようにする等、授業のオンライン配信を積極的に活用しました。学年を通した一斉授業により、効率的に学習内容の定着を図ることができるようになり、学年の先生方、ブロックの先生方同士でのコミュニケーションが増加しました。また、１人１台タブレット端末のＩＣＴ環境が実現し、電子黒板上で一人一人の意見を並べて表示することで、コロナ禍でも互いに意見を伝えあったり、考えを深めたりすることができています。全普通教室の電子黒板、１人１台タブレット端末の整備が実現し、モデル校としてＩＣＴ活用が推進されている本校は、新しい学びに向けて子供たちの学びを止めないように全職員で取り組んでいます。

これからもきれいな校舎、整っている教材教具、ＩＣＴ機器の最新のシステムを活用し、本校のよさを生かしながら、地域とともに成長していこうと考えています。

地域とともにある学校づくり

矢板市立安沢小学校　墨野倉　泰　宏

本校は、現在児童数70名の小規模校です。純農村地帯で、多くの家庭は学校の教育活動への関心が高く、学校行事やＰＴＡ活動にも積極的に参加し、協力的です。また、学区内には、人的資源が豊富で、生活科、社会科、総合的な学習の時間のゲストティーチャーや読み聞かせ、環境整備などで学校教育を支えてくださっています。子供たちの学びと育ちを支えるため、学校と地域の連携・協働は不可欠であり、日々多くの方々に感謝しながら教育活動を展開しています。その中から２つの活動を紹介します。

一つ目は、「藍のたねプロジェクト」です。このプロジェクトはＮＨＫさいたま放送局によるもので、大河ドラマ「青天を衝け」の中で藍の成育指導している松由拓大さんが、本校出身という御縁で総合的な学習の時間に講師として招きました。藍の種まきをはじめ、畑への定植、刈り取り、藍染め体験、報告会など、栽培活動をとおして、社会性を育てることができました。

二つ目は、４年生の総合的な学習の時間「安沢菜を育てよう」です。本校の総合的な学習の時間における体験的な学習では、「ふるさとのよさを知る」「本物に触れる」「たくさんの人とつながる」の３つの視点で、教科横断的に教育課程を編成しています。地名を取り入れた「安沢菜」の栽培、収穫、加工における知恵や工夫を知り、生まれ育つ地域に対する愛着を高め、生産者への感謝の気持ちを育成することを目標に、地域の企業と連携しながら活動を展開しています。

紹介させていただいた活動を、より充実させ、児童に「生きる力」を育めるような質の高い教育活動にできるよう、地域の教育力を最大限に生かす学校体制を構築していきたいと思います。

上都賀地区小中学校教頭会の取組

上都賀地区小中学校教頭会長　伊　藤　洋　二

上都賀地区小中学校教頭会は、鹿沼市・日光市の小学校48校・中学校25校、会員74名で組織されています。本地区は県全体の約３分の１を占める面積を有し、山間部が大部分を占めています。そのため、山間部に位置する学校のほとんどが小規模校で、児童･生徒数が100名に満たない学校も約半数あります。

研究部を中心とした課題の取組では、「未来を生きる力を育む教育課程の編成・実践・改善」を小中共通テーマに、小学校では「信頼される学校づくりに資する教育課程の評価の実施・改善に関する教頭の役割について」、自己評価・学校関係者評価等の改善や教頭の関与性について研究を深めています。更に、学校評価を効率よくかつ効果的に実践していくために、教頭の果たすべき役割を明確にすることに視点をあてた研究を進めています。

中学校では「信頼される学校づくりに資するカリキュラム・マネジメント」について、①教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成　②ＰＤＣＡサイクルを生かした学校課題の推進　③人的又は物的な体制の確保　の３つの側面を通して、組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図るために、教頭としての役割の検討を進めています。

また、今年度は、コロナウイルス感染症対策のため５月に予定していた第１回全体研修会を講話資料で各自の自己研修とし、定期総会も書面表決としました。更に11月に予定の第２回全体研修会も県全域に緊急事態宣言が発令されたことにより、開催の中止を余儀なくされ全体研修会は開催できませんでした。しかしながら、各校におけるコロナウイルス感染症のまん延防止対策や児童・生徒の感染防止のための消毒や保護者への啓発及び情報発信・風評被害の拡散防止等の徹底を重視し、教頭としてリーダーシップを発揮するよう呼びかけ、感染症対策の充実を図ることに重点を置いて取り組んで参りました。

足利地区小中学校教頭会の取組

足利地区小中学校教頭会長　岡　本　一　利

足利地区小中学校教頭会は、小学校22校、中学校11校の会員数33名で構成されています。会員は、研修部、調査部、厚生部のいずれかに所属し活動しています。研修会は年５回行われ、その内の１回（例年６月に実施）は外部講師を招き、組織のマネジメントなど教頭職について参考になる講師を招いての研修を実施しています。ここ２年間は、コロナ禍のため中止しました。

今年度は第12期の２年目として、「児童生徒一人一人に適切な対応と支援を行うための体制づくり」を研究主題に、「教頭として教職員にどうかかわっていくか」を副主題として研究を進めています。昨年度の１年目に各学校で課題となっている点を持ち寄り、その中から共通して取り組める内容について協議をしました。そこから研究主題、副主題を決定、各学校にて取り組んでいる様子や成果と課題、１年目としてのまとめを行いました。課題として、不登校や相談室登校をしている生徒の対応については、各学校で様々な対応をしていました。その中で教頭としての関与について、活発な議論がなされました。そういった背景には、教頭職が１～２年と、経験の短い先生の割合が令和２年度で約８割、令和３年度で約６割を占めていることも影響していると考えられます。そのため、特に教頭同士のつながりを大切にし、担任教師らとの関与性については意識しながら研究を進めてきました。

現在は２年目のまとめを行っています。集まっての意見交換が難しいことから、電話やメールなどを使用しています。教頭としての関与、そして教頭自身が孤立しないことを意識し、令和４年度の３年目に向けて、これまでの成果と課題を捉えていきます。

ひ　ろ　ば

アゲハの観察記録

宇都宮市立姿川中学校　黒　尾　宜　孝

５～６月、職員室前に山椒の木を置きました。アゲハの卵が幼虫、さなぎ、そしてアゲハチョウになるまでを生徒と観察し、共有しました。

毎日、タブレットをもってきて写真を撮る生徒、「副校長先生、いつアゲハになるの？」と質問する生徒がいました。「ＮＨＫ for school やタブレットで一緒に調べてみよう」と言いました。異動したばかりの学校で、生徒とともに活動できたのは、私にとっても有意義なことでした。

また、職員研修で「主体的・対話的で深い学び」を話すときにも、教師の意図的な仕掛けが必要なことにこの事例を使いました。また、ホームページや学校だよりで生徒・保護者にも紹介しました。

少年の日の思い出

那須塩原市立黒磯北中学校　益　子　弘　之

数ある少年時代の思い出の中で、今でも強烈に覚えている出来事がある。小２の６月だったと記憶している。父親の実家に遊びに行った際、従兄と従兄の３人の子供たち、そして私と妹の６人でホタル取りに出掛けた。父の実家の前は、緩やかな傾斜になっており田んぼになっていた。さらにその先には、雰囲気のある小川が流れていた。

従兄は懐中電灯、子供たち５人は各自が虫取り網か一升瓶を持ち、あぜ道を下りながら夢中になってホタルを追った。取ったホタルを一升瓶の中に入れて草で栓をすると、天然の懐中電灯になり、ちょうどいい具合に足下を照らしてくれた。

墓地の脇を通ってその先にある小川に行こうとしたその時、ホタルにしては大きすぎるし、飛び方も全く異なる光が前方上空をゆらゆらと尾を引きながら右手奥の方に消えていった。時間にして１５秒程の出来事だったと思うが、誰一人として言葉を発することはできなかった。その直後、一目散に家に戻ったのは言うまでもない。居間にいた大人たちに「見た！」と言うと、大人たちの「何を？」という問いかけに「火の玉！」と答えるのがやっとだった。

自然や生き物に対する畏敬の念を意識し始めたのは、その頃からである。

初任の地に思う

那須烏山市立境小学校　相ヶ瀬　　浩

４月に赴任した学校は、私の教員生活スタートの地である。当時勤めていた学校は廃校となってしまったが、統合された現在の学校には、私が初めて担任した子が保護者として数名おり、久しぶり会うことできた。

思い起こせば新任だった私は、子供たちの指導に苦労していた。言うことを聞かず、学力も身に付いていかない。悪循環となり、事務処理もはかどらず、一人遅くまで残って仕事をすることも多かった。

「なぜうまくいかないんだろう。」「何で先生になったんだろう。」自問する日が続いた。

そんなある日の夜、学校の灯りに気付いた近所の保護者が、職員室に訪れた。

「先生。いろいろ大変だろうけど、がんばりなよ。いいことあるから。」

そう言って、夕食を差し入れてくれた。涙ぐみながら食べたおにぎりと味噌汁は、忘れることのできない味だった。

気が付けば早30数年、教職の道を続けてきたが、「大変だけど、子供たちのためにがんばる」という思いは、常に私の根底にある。教育現場は日々、多様化・複雑化しているが、子供たちや保護者、地域の願いに応え、努力することが私たち教員の責務である。そんな気持ちで、教頭として、初任の地に恩返ししたいと考えている。

編集後記

11月に入り新型コロナウイルス感染症の新規感染者数は激減しましたが、第６波に備え、今なお警戒が必要な状況にあります。児童生徒の学ぶ権利を保障しながら、感染のリスクを可能な限り軽減していくという難しい課題はまだまだ続きそうです。

さて、第54号は２年目を迎えたコロナ禍での各地区の取組を中心に編集いたしました。来年度は、各地区の研究部の活動も以前のように再開できることを切に願います。末筆ながら、お忙しい中原稿をお寄せいただいた皆様に深く感謝申し上げます。（庄司）